

P201：〔江守徹宛〕・・・P201 「リズム（E）といつても、芝居のせりふ（F）の場合は強弱、高低、遅速の機械的な繰返し（Eの至小化）といつた單純なもの（Eの至小化）ではなく、それは第一に喋つてゐる言葉（F）の意味の輕重（Eの至大化）と、第二に話し手（△枠）がその言葉（F）をどういふ感情（心の動き：D1）で喋るか〔「形のある『物』として見せる（Eの至大化）」。即ち、P345 『言葉と意味（F）の背後にある哀切な心の動き（D1の至大化）を聲の形に出す（Eの至大化）』〕といふ、その時々の言葉（F）と話し手（△枠）の心（D1）との距離の變化（Eの至大化）と、すなはち字義通りの意味（F：なに）と字義には託し得ぬ裏の意味（D1：なぜ・心の動き）と、この二つが絹ひ交ぜになつて、觀客に近附いたり、それから遠ざかつたりしながら（Eの至大化）、觀客に心の體操や舞踏を快く行はせる（D1の至大化）ことを意味します」（以下文参照）。

\* 「相手（場C'）にせりふ（F）を直に掛けるな。せりふ（F）を自分（役者△枠）の心（D1）に掛けろ」⇒「大事なことはまず相手（C'）に掛かつてあるせりふ（F）一つ一つに鉤を付け（Eの至大化）、その都度、それを自分（△枠）の心（D1：心の動き）に引掛けながら言ふ（フレイジング：Eの至大化）、それは必ず動きや姿勢に出る（Eの至大化）筈のものです。あらゆるせりふ（F）は『・・・しながら』（E）のせりふであり、あらゆる動き（E）は『・・・言ひながら』（F）の動き（E）であると心得たら間違ひ無い」。ハムレットが言ふ「せりふ（F）に合はせて動き（E）、動き（E）に即してせりふ（F）を言ふ」と同。（中略）『何（F）を喋るか』ではなく『なぜ（D1心の動き：關係）喋るのか』の『なぜD1』を『何F』の裏に見せてくれて（Eの至大化）こそ芝居の面白味があるのです」（P320上～321『せりふと動き』）。

